

失望せずに祈り求めるために

ルカ福音書18:1-8

- 18:1 いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。
- 18:2 「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。
- 18:3 その町に、ひとりのやもめがいたが、彼のところにやって来ては、『私の相手をさばいて、私を守ってください』と言っていた。
- 18:4 彼は、しばらくは取り合わないでいたが、後には心ひそかに『私は神を恐れず人を人とも思わないが、
- 18:5 どうも、このやもめは、うるさくてしかたがないから、この女のために裁判をしてやることにしよう。でないと、ひっきりなしにやって来てうるさくてしかたがない』と言った。」
- 18:6 主は言われた。「不正な裁判官の言っていることを聞きなさい。
- 18:7 まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけなさい、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。
- 18:8 あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます。しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」

【祈りながら考えよう】

- (1) イエスがこのたとえで教えられた祈りの特徴は何ですか。
- (2) 祈りを妨げる私たちの分別はどんなものですか。
- (3) 私たちが神の国の選民にされたのは何をもってですか。

【解説】

（1）あきらめずに祈り続ける

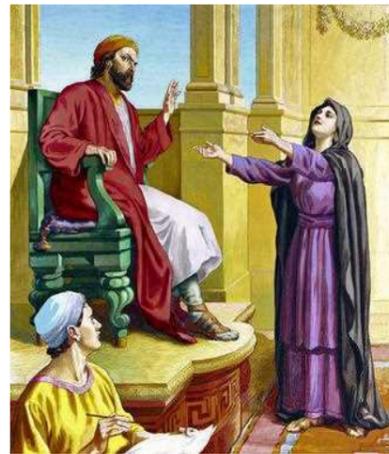
いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。（1節）この願ひ続けたやもめの《たとえ》は、《いつでも祈るべきであり、失望してはならないこと》を教えている。信仰の生活とは祈りの生活である。祈りとはどういうことなのか。祈りとはどのようにして祈っていくのか。本当に確かなものを信じるなら、その信じる出来事は、その確かなものへの絶えざる祈り、求めとなっていく。この祈るということがどういうことなのか、この世の人が皆あきらめていかなければならない出来事のただ中に立つても、なおあきらめず、なお信じ、なお祈っていく。それをここにイエスはたとえで語っておられる。

（2）不正な裁判官とやもめのたとえ

「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。その町に、ひとりのやもめがいたが、彼のところにやって来ては、『私の相手をさばいて、私を守ってください』と言っていた。」（2-3節）このたとえには、普段は《神》を恐れることも、《人》への心遣いも全くない不正な《裁判官》と、何者かにしいたげられている《やもめ》が登場する。この《やもめ》は正しいさばきを求めて裁判官のところに（しつこく）やって来た。非人道的な扱いから救い出してほしかったのである。

（3）裁判官を変えたやもめの訴え

彼は、しばらくは取り合わないでいたが、後には心ひそかに『私は神を恐れず人を人とも思わないが、どうも、このやもめは、うるさくてしかたがないから、この女のために裁判をしてやることにしよう。でないと、ひっきりなしにやって来てうるさくてしかたがない』と言った。」（4-5節）（やもめ）の申し立ては正当なものだったが、この《裁判官》はそれを取り合わなかった。普通の人であれば、しばらく取り合わないでおれば、もう泣き寝入りして来なくなる。そこが裁判官の付け目である。そうでなければ何か賄賂などを持って来て、是非ともやって来て来る。ところがこの（やもめ）はやめない。やめないどころか、夜となく昼となく、あらゆる時間、この裁判官に訴え続けた。この世の常識では、そんな裁判官の所へ手ぶらで行ったって裁いてくれない。それがこの町の常識であった。しかし彼女にとっては、そんな常識は無用であった。ただ裁いてもらいたい、それだけしか心になかった。彼女が定期的に自分の前に現れるので、裁判官はとうとう行動を起こした。彼女が（しつこく）要求したことが、この裁判官を動かした。



（4）祈りを妨げる分別

①求め続ける祈り

11章に違つたとえて、祈りとはどういうものであるか、どういう態度で祈るべきかということの主イエスは教えておられる。あの（主の祈り）といわれる祈りを、弟子たちに教えておられるそのあとに付け加えられている。また、イエスはこう言われた。「あなたがたのうち、だれかに友だちがいるとして、真夜中にその人のところに行き、『君。パンを三つ貸してくれ。友人が旅の途中、私のうちへ来たのだが、出してやるものがないのだ』と言ったとします。すると、彼は家の中からこう答えます。『めんどうをかけないでくれ。もう戸締まりもしてしまったし、子どもたちも私も寝ている。起きて、何かをやることはできない。』あなたがたに言いますが、彼は友だちだからということで起きて何かを与えることはしないにしても、あくまで頼み続けるなら、そのためには起き上がって、必要な物を与えるでしょう。わたしは、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。」（ルカ11:5-9）

《求めなさい》の時制は（現在形）であるから、求め続けなさいと訳せる。そうすれば与えられる。捜し続けなさい、そうすれば見つかる。門をたたき続けなさい、そうすれば開けてもらえる。これも祈りについてのたとえであって、同じことが教えられているが、この（やもめ）の場合においてはさらに（徹底した祈りの態度）が示されている。私たちは同じことをいくら祈っても聞かれそうにないと、祈るのをやめてしまうことがある。たとえば、家族の者の救いとか、友人、知人の救いについて祈っている。しかし、そのうちにこの祈りは聞かれたいのではないかと思ったりして、途中で祈るのをやめてしまうことがある。

②本当の信仰は失望で終わらない

どうしてやめてしまうのかと言うと、他の人の祈りはどんどん聞かれているのに、自分の祈りは聞かれたいために「失望」してしまうからである。しかし、本当の信仰は決して失望に終わらない。私たちが「失望しないでいつも祈る」ことができるのは、私たちの叫び求めを放っておかれぬ（恵みの神）がおられるからである。その（恵みの神）が私たちのすぐそばにいて、私たちに助けようとしておられることをよく知ることが重要である。

③この世の常識、分別で判断しない

祈りとは、ちょっと願って、すぐに思うように答えられないと、自分の分別でそれを考え、判断し、そしてやめてしまうというものではない。（やもめ）のように訴えたが、周りの人からそんなこと願ったって聞かれぬよ、もう二度三度祈っているけれど全然聞いてもらえないではないか。だから祈ったって無駄だ。むしろそんなことを祈っていけば余計つらい思いを増すばかりだ、だからやめてじっとしていた方がいいと、言われる。私たちが祈る時、少し答えが長引くと、こんな声がどこからか聞こえて来る。周りからというより（自分の心の中から）聞こえて来る。信仰深そうな声も聞こえて来る。御心でなければ聞かれぬのだと。信仰深そうに、御心を第1にする者であるかのように、その祈りをやめさせる、消極的にさせる。結局常識、分別、そういうものの判断で横にそれてしまう。そして信仰というものが、結局はこの世の常識以外の何ものでもない、人間の経験内の出来事ではない、分別以外の何ものでもない、そういうものになってしまう。信仰信仰と言いながら、祈っているとと言いながら、また神は全知全能だと言いながら、結局はこの世の人と同じ（あきらめ）の方向に行ってしまう。イエスはこのたとえをもってそういう信仰をぶち破ろうとしておられる。そういう祈りの間違いを指摘しておられる。

（5）神の国の選民

主は言われた。「不正な裁判官の言っていることを聞きなさい。まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけなさい、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。（6-7節）《主》は弟子たちに次のように説かれた。もし《不正な裁判官》が、しつこく要求するからという理由であわれな（やもめ）のために行動を起こすとすれば、公明正大な《神》がご自分の《選民》のために介入して下さるのは当たり前のことではないかと。《選民》は、神の国のために、この世から選ばとられた神の民である。選ばれたのは、私たちの立派さのゆえではない。この（やもめ）のような存在は、だれと比べても、誇れるものがない者である。イエスの時代においては、取税人、罪人と言われる者、遊女の類いと言われる者である。そういう者こそが神の国においては、イエス・キリストの十字架で流された血潮のゆえに、キリストのいっさいにおいて選ばれる者となる。心の貧しい者は幸いなり、天の御国はその人のものであると言われている。私たちがキリストにあり、神の国に望みをおいて生きる者とされているならば、私たちはここに言われている選民である。キリストの血でこの世から区別された者、買い取られた者である。

（6）神のさばきがなされる時が来る

あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます。しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」（8節）神が人に対して（それ以上忍耐なさらぬ時）がやって来る。その時、神は、ご自分に従う者たちを迫害する者どもを罰して下さる。主イエスは、「『しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか』という問いかけでこのたとえを終えられた。ここでの信仰は、あのあわれなやもめが持っていたような信仰を意味しているに違いない。主が再臨される時まで、日夜、神を呼び求めるような信仰を持つことができるよう、各自が励まされなければならない。

祈りについては、こう述べています。
 「祝福を求める唯一の根拠として、イエス・キリストの贖いに、全面的に依り頼むこと。自分の罪を言い表し、そこから離れること。聖書から与えられる約束の御言葉を信じ、神の御心に従って求めること。祈っても、すぐに聞かれなくても、執拗に願い求めること。何年でも祈り続ける忍耐が必要です」と。
 以上のことを、ミュラーは実践し、祈りは必ず聴かれる証しとして、祈りの記録を残しました。

スクライヴィン

数ある賛美歌の中で、最も愛唱されている歌が、「いつくしみ深き友なるイエス」です。その作詞者であるジョセフ・スクライヴィンと、彼の祈りについて記します。

その生涯（一八一九〜一八八六年）

アイルランドの裕福な家庭に生まれ、名門トリニティ大学を卒業。同大学の先輩であるネルソン・タービー兄らが始めた、プリマス・ブラザレンの群れに集っていました。待ち望んだ結婚式の前日、水の事故で婚約者を失い、激しい衝撃を受けます。そして、傷心の中で、新しい生き方を求めて二十五歳の時、カナダに移住します。彼は学校の教師として働きますが、その傍ら、自分と同じ悲しい思いを抱く人々に仕える決心をし実践します。そうして四十一歳の時、エリザと出会い婚約します。ところが、彼女は結核によつて結婚前、天に召されます。一度ならず二度までも、婚約者に先立たれたのです。深い悲しみを抱えて、祈りの日々を送ります。しかし、信仰によつて乗り越えます。彼は自分のことで深い悲しみと落胆に陥り、病床にあつ

祈りの道（浜田耕司郎著）より抜粋

ジョージ・ミュラー

キリストを信じる者は皆、祈りの人です。その中でも特に、祈りの人として証した、歴史上の人物について記してきましたが、今回、取り上げるのは、ジョージ・ミュラー（一八〇五〜一八九八年）です。

変えられた人

どんなに素行が悪くても、キリストは変える力をお持ちです。そのことを、若き日のミュラーは示しています。

彼は学力優秀な学生でしたが、よく嘘をつきました。また、万引きの常習犯でした。父は厳しく叱りましたが、反省の色はなく、悪行を続けました。そのため、刑務所に一時、収監されたこともあったほどです。そんな彼でしたが、二十歳の時、敬虔主義の信仰が主流のハレ大学に入学します。そこで友人に恵まれ、彼に誘われて教会の祈り会に出席しました。ミュラーは熱心に祈る人々を初めて見ます。説教「きよく純粹な福音」が終わると、みな跪いて熱心に祈り始めました。その熱心な祈りに魅了されたのです。その夜、彼はキリストを信じ、まったく変えられたのです。ここに、祈りの人として世界中に知られるようになった、彼の原点があったのです。

でも、そんなに簡単に人が変わり得るのだろうかと思っても知れません。が、キリストはどんな人をも、御自身に似た者に変える力をお持ちです。ですから、自分を見て失望したり、落胆してはいけません。

彼の生涯

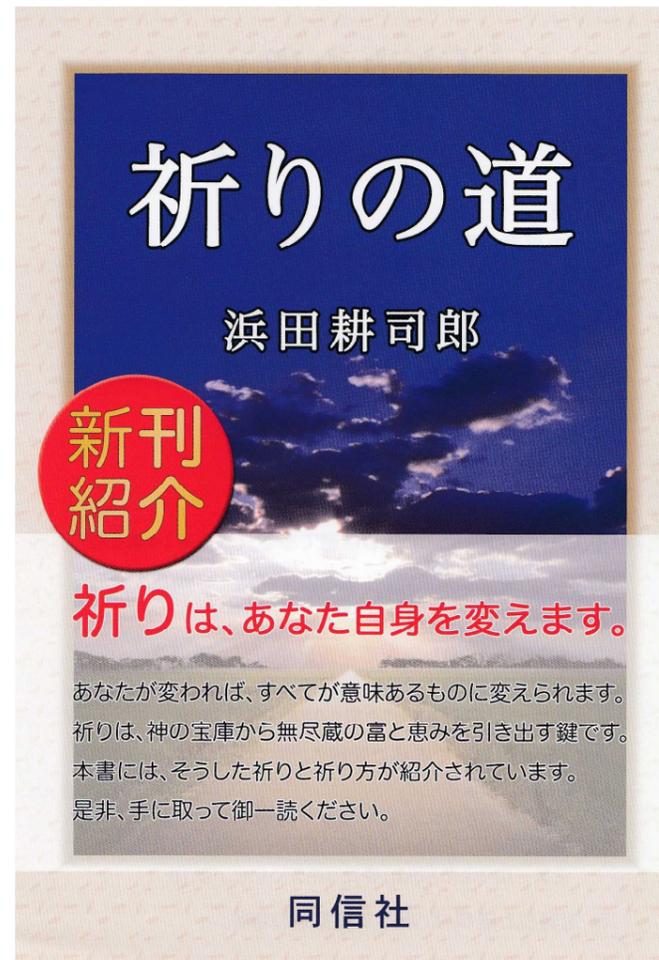
回心によつて変えられたミュラーは、宣教師になることを決心し、卒業後ドイツからイギリスに渡つて、しばらく牧師として働きます。その後、彼がプリストルに移った一八三四年、既存教会の伝統から離れます。彼のベテスタ教会は聖職者制度や国家から受ける給料を廃止し、徹底的に個人の告白と献身を基礎にし、パン裂きを礼拝の中心に置きました。そこでミュラーは、孤児たちが収容されていた救貧院の実情を目撃して、孤児院を設立するよう導かれます。それは فرانケ という先達がハレ大学を拠点に設立した孤児院をモデルとしたものでした。ミュラーは、生ける神だけに依り頼んで孤児院を始めました。「口を広く開けよ、わたしはそれを満たそう」（詩編81編11節）の御言葉に導かれ、口を大きく開けて神に求め始めました。彼を支援しようと集まった人々は、孤児院運営財源を用意するためにバザーを開いて募金運動を

『祈りの道』

浜田耕司郎 著(四六判・260頁)
 同信社 定価1500円+税

- 第1部 祈りの原理・原則が記されています。
- 第2部 その祈りを生きた「祈りの人」が、聖書の人物から12名、歴史上の人物から13名が取り上げられています。そして最後に、内容がまとめられ、八木重吉の詩「祈」で締め括られています。
- ゆきなれた路の
 なつかしくて耐えられぬように
 わたしの祈りのみちをつくりたい
- イエスは言われた。「わたしは道である」(ヨハネ14章6節)

お求めは、下記までご連絡ください。
 ◎ 同信社
 〒164-0001 東京都中野区中野 1-45-12
 電話 03-3361-1744 FAX 03-3361-1743
 Eメール otoiawase@doshinkai.org
 あるいは、著者まで直接ご連絡ください。
 ◎ 浜田耕司郎
 〒253-0056 神奈川県茅ヶ崎市共恵 2-8-18
 電話 0467-85-2809 (FAXも兼用)
 Eメール hamadou@jcom.home.ne.jp
 ※ 消費税と送料は、当方で負担致します。



しようと提案しました。しかし、ミュラーはそうした方法でお金を手に入れ、孤児院を運営するのは神の御心ではないと説得します。荒野でマナに養われたイスラエルの民のように、徹底して、神だけに祈り求める道を選びました。そのため、最後に残った小麦粉でパンを作つて夕方方の食卓を整えながら、次の日の朝のために祈らなければならない日々が繰り返されるとい困難が、孤児院運営には絶えずありました。そのような時、ミュラーは絶え間ない祈りによつて、必要なすべてのものを切に祈り求めました。彼が祈つた物品と食べ物、いつも間違いない供給されました。そうした数ある事例の中から一つを述べます。

暴風雨で荒れた次の日の朝、孤児院には食べる物が何も残っていませんでした。四百人の孤児たちと一緒に何もない食卓を囲んで、ミュラーは手を取り合つて祈りました。彼の祈りが終わった時、一台の馬車が孤児院の門を叩きました。その馬車には、朝に焼いたパンと新鮮な牛乳が一杯積まれていました。近くの工場従業員たちのための野遊会に使うために注文した品物でしたが、暴風雨でキャンセルされ、孤児たちに送られたのでした。ミュラーはこのようにして孤児院を運営した六十五年間の瞬間瞬間、奇跡的な神様の供給を体験しました。彼は、神は求める者に最善をなしてくださることを疑うことなく信じ、その信頼の祈りは、いつも答えられました。人間的な方策には頼らず、神のみに頼るとい方法を生涯貫き、多くの孤児たちを救済したのです。日本においては、石井十次の岡山孤児院のモデルとなり、石井に決定的な影響を与えました。ハドソン・テラーもミュラーに倣い、祈りによつて神にだけ頼る信仰で、

中国宣教に偉大な足跡を残しました。ミュラーは七十歳の時から十七年間、世界各地の教会から招かれ、信仰のみで生きる人生について人々に語りました。

(注) 同二一八三〇年頃、イギリス南部の港町プリマスで、タービー兄らによる新しい群れが起こされています。互いに兄弟姉妹と呼び合い、パン裂き(聖餐)を中心とした、革新的な礼拝が始められました。その群れはプリマス・ブラザレンと呼ばれました。ミュラーもその群れに加わった一人でした。この群れはイギリス各地に拡がり、加わる者が増えました。五十年後、その中にH・C・ブランド兄がいました。ブランド兄は宣教の使命を感じ、一八八八(明治21)年、単独で来日します(24歳)。どこからも援助を受けない自給独立伝道者として、横浜に到着します。彼を通してできた群れが、キリスト同信会です。

祈りの秘訣

ミュラーは、何事かを願う時、ただ信仰のみに頼りました。この原則がある歯科医から学びました。更に、聖書の御言葉に徹底して信頼することを、原則としました。そのため聖書を通読すること、聖書全体を理解することを実践しました。本の中の本である聖書を熱心に祈りをもって黙想しつつ、繰り返し繰り返し読むこと、そして生涯読み続けるべきことを、ミュラーは勧めました。そして、自分の知恵によつて神の言葉を理解できるほど、自分は賢いなどと思いません。聖書を学ぶ時には必ず聖霊の助けを仰ぐことを忘れないようにと語りました。